

預言者エゼキエルは元来エルサレム神殿の祭司で(エゼキエル 1:3)、紀元前 598 年、王と共に第一回捕囚民としてバビロニアに連行された。彼の地で預言者は幻を見る。

「谷の上には非常に多くの骨があり、また見ると、それは甚だしく枯れていた(37:2)」。おびたしい「枯れた骨」は呻き苦しむ民の象徴で、神の霊が預言者にその民の心と状況を見せた(37:1)。

神は問う、「これらの骨は生き返ることができるか(37:3)」と。預言者は「主なる神よ、あなたのみがご存知です(37:3)」と答えた。「神のみがご存知」。

すなわち人間の無力の自覚であり、いっさいを神に委ねる、という決意の簡潔な表現なのだろう。

預言者の決意(信仰)に応じて神は命ずる。「これらの骨に向かって預言し、彼らに言いなさい。枯れた骨よ、主の言葉を聞け。これらの骨に向かって、主なる神はこう言われる。見よ、わたしはお前たちの中に霊を吹き込む。すると、お前たちは生き返る(37:4~5)」。預言は、神の御言葉に他ならない。

御言葉によって、霊(風)が四方から吹き(37:9)、骨に肉が付いて生き返る(37:6)。そして主こそが神たることを知る(37:6)。

御言葉をめあてに聖霊が吹き(37:4~5)、枯れた骨と化した者に新たな命が与えられ、まことの神と出会う。キリスト以前から神の民は復活の奇跡に与っていた。

復活とは、すでに生き、すでに死んでいる人間が、御言葉を受け取り、神の息(霊)によって永遠なる神の命に与ること。

十字架で死んだイエスは復活し、女たちが最初の証言者になった(ルカ 24:9)。

復活を伝えた「天使」とは、イエスの言葉を思い起こさせる(24:6)「御言葉」。あるいはまた、見ている方向を「死」から「復活」へと転換させる(24:5~6)「聖霊の力」と言えるかもしれない。

天使とは擬人化された神の働き。

イエスは次に、十字架に挫折して帰郷する二人の弟子の前に現われる(24:13~15)。一連のやり取りで弟子たちは、謎の旅人に尋常ならざる何かを予感し強引に同宿を願う(24:29)。

夕食の席、イエスがパンを裂いて彼らに分かつと(24:31)、「二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった(24:31)」。

パンはキリストの体であり(22:19)、その恵みに与ることで「二人の目が開けた」。

目が開けると復活のキリストに出会う。復活の真に出会うとキリストは消え、己自身の深部と出会う(24:32)。キリストに出会い、心開く者は、もはやキリストの像や形にこだわらなくなる。

キリストは霊として枯れた骨を吹き抜け、筋や肉や皮膚を与え(エゼキエル 37:6)、二つとない被造物である私を獲得させてくれる。

キリストの働きはこの身をもって明らかにされる。だが、それで完全ではない。

二人の弟子はエルサレムへ戻る。復活したイエスについて仲間と語り合っていると(ルカ 24:33~35)、そこにイエスが現れ「シャーローム/平安あれ」と挨拶した(24:36)。

するとどうだろう。弟子たちは喜ぶどころか「恐れおののき、亡霊を見ているのだと思った(24:37)」。彼らは復活に心開きながらも、神の「命」ではなく人間の「死」にこだわっている。「枯れた骨」に肉が充分ついていないからなのか。

枯れた骨が皮膚で覆われ霊が吹き込まれるには(エゼキエル 37:6)、聖霊降臨まで待たねばならない(ルカ 24:49)。しかし目は開いている(24:45)。目を瞑らなければ、新しい命への方向は見間違えないだろう。



《おまけのひとこと》

私は骨 骨に肉や皮膚がつき 命の息吹がこれを生かしめる 霊が吹き抜け私は生きるものとなる
枯れている骨 地中で幾世紀も死に続けている太古の花のごとく 霊が吹くと 忽然と目覚める